

夢前川流域における景観形成過程

—治水事業と地域資源に着目して—

加茂 祐樹

キーワード：流域，景観，治水事業，地域資源，地域活性化，夢前川流域

1. はじめに

日本では、集中豪雨や地震、猛暑などの自然災害が毎年のように起こり、防災・減災に対する意識が高まっている。災害やそれに伴う治水事業などによって景観は変化する。また、地域振興など人々の営みや観光名所の存在などによってその地域の景観に特色が現れる。

そこで、流域に着目し、夢前川流域における景観形成の過程を治水事業と地域資源の観点から解明しようとするものである。流域に着目した理由として、川を主体とすることで、それに付随する文化や自然などを分析し、景観をとらえやすくなると考えたからである。田中（2002, p. 15）は、「近年、流域を単位とした環境管理への取り組みが広まりを見せつつある」と述べ、養老・岸（2009, pp. 174-175）では「流域全体で防災に取り組むという姿勢が必要不可欠」と述べられており、流域思考で地域や環境を捉えることが珍しくない時代となってきた。

夢前川流域は、同じ兵庫県の播州五川に含まれる市川、揖保川、加古川、千種川などと比べ、急流であり、治水事業の歴史も古く、水害や洪水被害も起きている。自然災害に立ち向かうために、治水技術を向上させてきたが、治水事業によって地域の景観が大きく変化してしまうという懸念がある。また、自然災害に加え、社会問題の一つに少子高齢化が挙げられる。これにより耕作地の放棄や住宅の老朽化などが増加し、景観に大きな影響を与えてしまう。そこで、地域活性化を進め、活性化や環境整備が求められている。

本研究において、田中（2002）の基本的な構図を参考に作成した夢前川流域における景観形成構図（図1）をベースに研究を進める。なぜなら、一つの流域内の関係を可視化し、上流域・中流域の関係性を明瞭化するためである。加えて、景観形成の過程を解明するため、三つの観点から考察する。

一つ目は、夢前川の上流・中流域の自然的地形と景観を地形図や航空写真、古絵図などから明らかにする。二つ目は、水害対策として江戸時代に姫路藩が設置した堰の事例を取り上げる。三つ目は、流域内の産業や地域資源である置塩城と書写山を取り上げ、これらが流域の景観や地域活性化にどのような影響を与えているか、歴史にも触れ、考察する。これらを統合して、空間的、時間的に、比較検討し夢前川流域を総合的に分析して考察する。

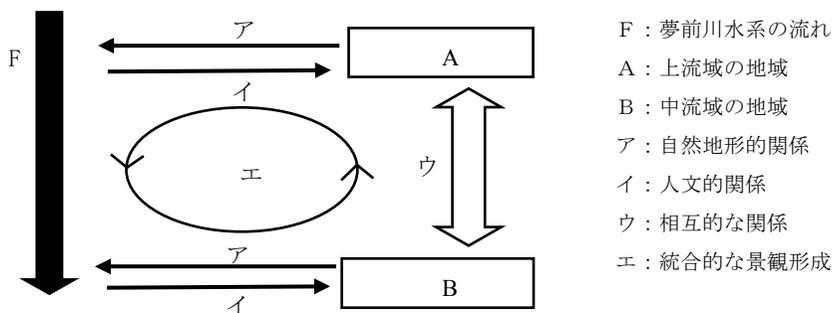


図1 夢前川流域における景観形成構図

出所 田中（2002）より一部修正

2. 夢前川流域の概要

（1）水系と流域

夢前川水系は、兵庫県姫路市に位置する流長 39.8 km、流域面積 202 km²の二級河川である。その源流は、雪彦山で、立船野（旧飾磨郡夢前町山之内、現姫路市夢前町山之内）あたりで本流を形成し、播磨灘に流れる。本研究の流域範囲として、上流域を行政区分に沿った旧夢前町とし、中流域を横関（現姫路市御立）から国道2号線を含む地域（青山、下手野、西今宿、東今宿、南今宿、車崎、神子岡前）まで、下流域を、国道2号線を含む地域より南の地域とする（図2）。

支川は主に、菅生川、水尾川、坪川、明神川、寺河内川、護持川、西山川の7つの川である（兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所，2006，pp. 3-4）。最長の支川である菅生川と他の支川を比べると約15 kmもの差があり、ほとんどの支川が5 km以下である。（図3）。このように、多くの支流によって夢前川の水系は形成され、幾度となく蛇行を重ねつつもほぼ縦流し、姫路平野を経て播磨灘へと流れている。このように夢前川水系は、複数の支川から成り、夢前川流域という範囲を創り出している。

流域を上流域、中流域、下流域に分けてそれぞれの特徴を挙げる。上流域は山間地帯、中流域では、大きな扇状地を形成している。この地形が、周辺地域に度々水害を与えてきた歴史がある。下流域は、近代以降埋め立てが進み、工業が発達し、特に河口部は播磨工業地帯の一部で、鉄鋼や化学製品等が生産されている。

（2）地域活性化の視点

図4を見てみると、夢前川上流域にあたる夢前町の60～74歳までの男女の人口が、他の年齢層と比べて高いことが分かる。一方で、10歳以下の割合が高齢者に比べ、低く出生率の減少が著しい。このことから少子高齢化が進んでいることが分かる。少子高齢化を解消するためにも、地域活性化は必要不可欠となる。

上記で述べた問題を解消するため、姫路市産業農林水産部では、姫路市北部農山村地域活性化構想を掲げている。この構想の目的とは、「主に夢前町および安富町の区域を『北部農山村地域』と定義し、目指すべき新たな地域づくりを進めるための方向性を示すことで、地域が主体的な取り組みを通して活性化を目指すために策定するもの」としている。また、姫路

市北部農山村地域活性化基本計画（2017～2026年）では、三つの基本方針を挙げ、魅力ある産業を目指し、地域コミュニティの再生に取り組みながら、持続的な生産活動や地域づくりなどの保全を図ろうとしている。

中流域及び下流域では、姫路市は、2013年から「夢前川の環境を守る会」を立ち上げ、毎年夏休みに川遊びと自然観察会を開催している。また、夢前川にまつわる民話や紙芝居等の川の魅力を伝える民間伝承や環境学習、自然保護活動に努めている。中流域における地域活性化については、世界文化遺産姫路城に近いことや書写山等の観光資源を有していることに加え、市が文教地区として特化し、早くから公共施設等の誘致に取り組んできたところである。それに伴い、その利便性から急激な人口流入があった。

このように特化の是非は別として夢前川流域の上流域，中・下流域においても新たに地域格差の問題や景観の変化の問題も生まれてきている。

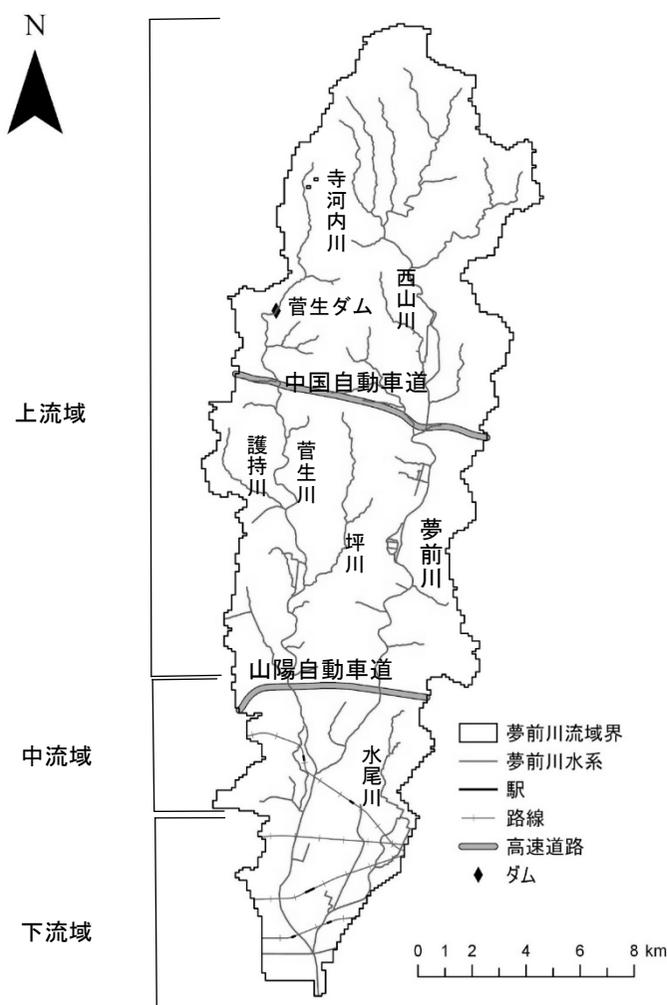


図2 夢前川流域全体図

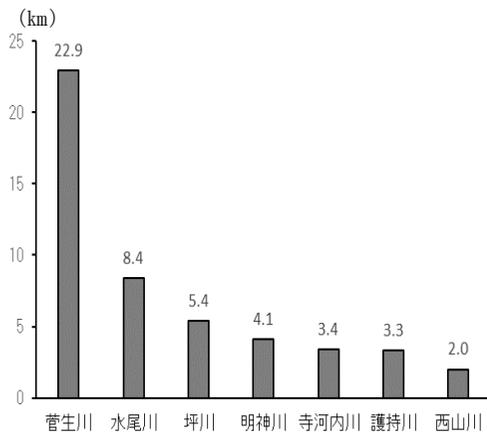


図3 夢前川支流の流長

出所 兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所
(2006)より筆者作成

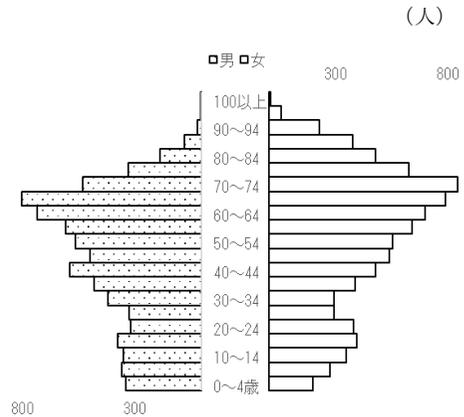


図4 夢前町5歳階級別人口比

出所 住民基本台帳より筆者作成
(2020年9月現在)

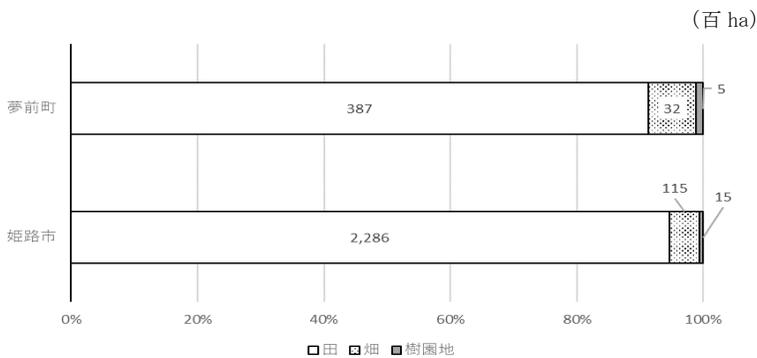


図5 経営耕地面積に占める田・畑・樹林地の割合 (2015年)

注) グラフ内の値は面積 (百ha) を示す

出所 農林水産省 (2016)より一部修正して作成

3. 治水事業による景観形成

(1) 流域と景観

景観とは、風景に近い意味あいをもった言葉として理解される一方、地理学の中では地表の空間的まとまりを表現する場合にも用いられてきた。そもそも景観は、人間主体的な地表面の認識像であり、主体の認識程度に応じて景観の意味するところが異なってくるのは当然である (武内, 1988)。すなわち、景観を捉えるにあたり、風景だけを捉えるのではなく、人の営みから生まれる文化等も含めたものが景観である。

景観を考える場合、自然景観と人文景観の二つの見方がある。自然景観では、地形図など

を活用して、夢前川の流路の特色を分析し考察する。具体的に、自然景観は、刻々と時代と共に変化し、しかも多様性も豊かなものである。川の流れはもちろん、気象や季節の変化による木々の変化等、時間によって見えるものは違う。また、それぞれの時代の施策により景観が変化する場合もある。そういった変化を、夢前川の自然景観として研究することで、これまで夢前川が果たした役割や流域内での産業等の移り変わりをより明確に表してくれている。次に、人文景観では、人工的に作られた流路や産業を取り上げ、分析し考察する。具体的には、人工的に作られた景観であるので、流域内に住む人たち、流域外から来た人たちが、利便性を図るために橋や道路を作ったり、治水事業等によるダムや堰を建設したりして、今日の夢前川流域の景観を作り出した。

(2) 江戸時代の流路変更

流路変更は、人文景観の中に含まれ、大きく景観を変化させる場合がある。夢前川流域の景観形成過程において、江戸時代の流路変更の歴史が大きな出来事の一つとなる。

夢前川は、江戸時代初めまで、上流域と中流域の境である現在の姫路市御立（横関地区）で、分流し、周辺村々への洪水被害や姫路城下への水害が懸念されていた。そこで姫路藩主榊原忠次は、1656年に藩の事業として、夢前川の流路の一本化のため改修工事を行った。具体的には、夢前川の左岸に大規模な石垣を築くことで、分流していた流れを現夢前川の流れに一本化するという大事業の実施である。この堤防が、横堰（現横関）である。この横関（堰）が築かれることにより、姫路城下や周辺村々の水害防止となった。また、流路変更により誕生した大規模な河川敷は、その後、新田開発が行われ、耕作地化が成し遂げられた。資料1は、1874（明治7）年頃の横関辺りの略絵図である。西に描かれている川は置塩川（夢前川）であり、橋を挟み東西をつなぐ道が西国道である。また、河川の東に沿って鹿谷道が通っている。図中の石垣部分が、横関である。姫路藩が総力を結集して築堤したものである。鹿谷道は、夢前川上流域と姫路城下を結ぶ古くからの主要道であり、西国道は京へ上り下り道として、また書写山巡礼道として古くから発達していた。横関が交通の要であると同時に、軍事上も重要な位置にあったことが分かる。河川の景観変化を見る上で、このような河川絵図が有効である。この堰は1889（明治22）年の大洪水の際、破壊されたが大修理が行われ、その後も改修された。

横堰構築以前の流路はどうかを地形図および航空写真、古絵図で考察する。図6を見ると、御立北（二）のあたりで本流が南西方向へ大きく曲がっていることが分かる。資料2は、夢前川の旧流路を示した図である。現在の地名と重ねて見ると本流の流れは、御立北（二）から御立町内を直流し、御立中（五）の住吉神社裏を通過、更に旧鹿谷道沿いに四軒屋へと出て、直線的に流れ、河岸段丘を形成しながら姫路城下方面へ流れていた。変更される前の流路の跡は、御立北（五）御立中（七）御立中（六）を直進しており地形図上にも表れている。

景観を見ると、この横堰の構築によって、流路の右岸側には大量の土砂が堆積し、書写山系からの谷川水と合わさり、広大な扇状地を形成し、また左岸は、流路を断たれたことにより大規模な河原平地が出現する。この河原平地がその後開拓され、農地化されたのである。この流路変更は、治水と同時に農地拡大を目指しており、このことによる中流域の景観が時

代と共に大きく変化していく契機となったと言える。このようにして現在の地形が形成されたのである。地形図および航空写真の書写駅（ロープウェイ）以南に広がる広大な生活空間は、こうして誕生した。まさに近世以降に形成された人文的景観である。

（３）治水の発展と環境整備

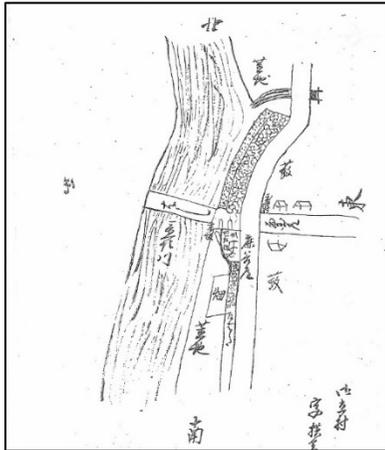
水害被害を戦後約 70 年の間で分析すると、堤防やダムなどの治水施設の整備および各種気象警報の発令数の増加に伴って、水害被害は減少傾向にあることが明らかになっている（末次，2016）。洪水被害で恐れられることの一つに堤防の決壊がある。夢前川流域では、1889（明治 22）年夢前川堤防の決壊が起きた。

夢前川の計画的な河川改修は、1960 年から実施した夢前川整備事業が最初であり、その年から 1986 年にわたり、夢前川京見橋から書写橋までの約 8.8 km 区間で、1989 年からは、夢前町置本地先から宮置橋までの約 2.2 km の区間で総合流域防災事業を実施している。これらの工事等によって、ほぼ現状の河川道形状となった（兵庫県，2014）。

昭和時代からの夢前川流域で大きな被害を起こした洪水は、1965 年と 1976 年である。表 1 から読み取れるように夢前川流域は、1965 年 9 月の台風 24 号では浸水面積 1,823ha、浸水家屋 6,346 戸、1976 年 9 月の台風 17 号では、浸水面積 720ha、浸水家屋 6,575 戸の被害が発生した。また、平成に入ってから、1990 年 9 月の台風 19 号による出水で、浸水面積 121ha、浸水家屋 2,454 戸の被害が発生した。この出来事を契機として、水系一貫した治水計画の策定が必要となり、工事実施基本計画を平成元年に策定した。夢前川流域にある菅生ダムは、昭和 44 年度より洪水調節と不特定用水補給を目的として着工し、昭和 53 年度に完成した。本流域の治水ダムとして大きな役割を果たしている。さらに、1992 年以降の農地および宅地浸水、浸水家屋の被害数値は大幅に減少していることが読み取れる。これらのことから、工事実施基本計画の成果が表れていることが分かる。

次に環境整備について述べる。兵庫県では、「“ひょうご・人と自然の川づくり”基本理念・基本方針」を定め、川のもつ多様な機能と生活との豊かな関わりを次世代に継承していくため、治水・利水の充実のほかにも、生態系や水文化・景観、親水性など川の環境にも配慮した人と自然が共生する豊かな川づくりを進めている。この県の理念・方針に基づいて、夢前川ではボランティア団体による清掃作業や除草作業、花壇の植栽などの愛護活動や、小中学校の総合学習の一環として、夢前川を題材とした環境学習も行われている。このように、夢前川流域の各河川では、上流部から下流部まで、貴重な自然とのふれあい空間として利用されている。

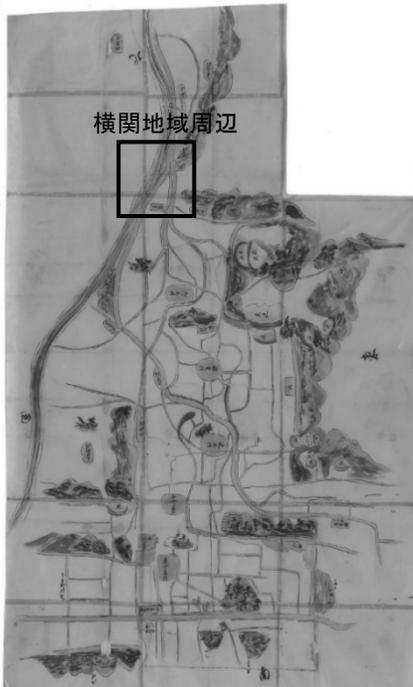
治水とは、単に堤防等で水害を治めることだけではないと考える。環境をつくる取り組みにもある通り、ボランティア団体による清掃作業や除草作業も治水であると考えられる。水を治めるにあたり、汚れていれば、正しく管理ができていない。治水技術の向上等により、水害の被害は、少しだが抑えられている。自然災害は、予測困難出あり、すぐに対策できるものではない。だからこそ、過去の災害の事実を忘れず、河川の特性を知ることで、防災・減災につながるのだと考える。



資料1 横関周辺略絵図 (1874年)
出所 御立元庄屋置塩家文書



図6 御立(横関)地域の地形図
出所 国土地理院



資料2 江戸時代末期の横関付近
夢前川旧流路図
出所 辻井集会所文書

表1 夢前川主要洪水の被害概要

西暦(年) 月日	異常気象名	浸水面積 (ha)			浸水家屋 (棟)		
		農地	宅地その他	計	床下浸水	床上浸水	計
1964 8.24	台風14号	20		20	53	2	55
1965 9.14~15	台風24号	1,503	320	1,823	5,114	1,232	6,346
1976 9.7~14	台風17号	312	408	720	5,734	841	6,575
1980 8.28	豪雨	0	8	8	301	12	313
1987 10.15~18	台風19号	0	4	4	173	13	186
1990 9.11~20	台風19号	73	48.1	121.1	2,355	99	2,454
1992 8.17~20	台風11号	4	0.6	4.6	30	0	30
1997 7.25~29	台風9号	0	178	178	37	2	39
2004 10.18~22	台風23号	0	66	66	34	2	36

出所 中播磨推進計画より筆者作成

4. 地域資源と地域活性化

(1) 上流域と中流域の産業

表2は、夢前川流域の産業をまとめたものである。その中から、夢前川流域の主な特産品から、鹿谷茶と書写塗、温泉郷について詳しく述べる。これらの産業は、いずれも、かつては全国に名を知らせていた。しかし、今日では、消滅した産業、一時は消滅したが現在復活した産業、古くから現在も存続している産業の三つのパターンがある。それらを代表する産業として、前述の三点に焦点をあて、検討する。

最初に、鹿谷茶について述べる。鹿谷茶は、雪彦山のふもと、夢前川最上流域に位置する坂根地域で古くから盛んに栽培され、播磨地域の特産品として広く知られていた。八木(1988, 248)には、鹿谷茶が播磨国の特産品として記されている。また、豊臣秀吉が織田信長に献上した品であると記されている。鹿谷茶は、姫路藩の専売品として、藩財政の立て直しの大きな助けとなった。この地域における鹿谷茶の生産については、気候の寒暖差と適度な雨量が良茶を生産するという適地適作の原作に基づいた生産に適していたことと、水田耕作が困難な山間の農民にとって、土地・自然の有効利用により賃金を得るのに重要な産物であったことが考えられる。

次に、書写塗について述べる。書写塗とは、伝統的な漆器のことである。書写塗は、高級漆器に比べて技法は単純であるが、堅牢優美なため実用に供された。書写山円教寺およびその周辺からは、その由緒や技法が記されてある文書記録はまだ発見されていないが、現在その価値が見直され、漆器の研究や再現が行われている。また、より広く知ってもらう目的もあって、重要文化財書写山寿量院で書写塗の漆器を使用した精進料理が提供されている。

最後に、保養施設としての温泉地について述べる。現在の姫路市夢前町塩田に位置する塩田温泉郷である。江戸時代の元文の頃(1736~1741年)には源泉を中心に湯治宿を兼ねた民家が4~10軒あり、泉質や効能は口伝えで広がって、遠方地域からの湯治客も訪れにぎわっていた。しかし、バブルの崩壊や阪神・淡路大震災、施設の老朽化、後継者問題等々で、減少傾向である。この地域の活性化のために、温泉の魅力を発信し、書写山や置塩城跡など流域の周辺施設、文化財との連携した観光ルートの設定などによる観光客を多く呼び込めるような取り組みが必要となる。

以上、三点に焦点化して述べたが、これらの産業は、単独に存在したのではなく、それぞれの産業が関連し合いながら、その歴史的発展や地場産業の発展とともにこの流域特有の景観を創り出してきたのである。産業と景観とを結びつけて見てみると、上流域では主に農業、中流域では農業に加え伝統文化などの産業が見られ、それが上流域や中流域の特色となり、名物となっているのである。

(2) 上流域の地域資源－置塩城

上流域内で歴史的に由緒あるのが、置塩城である。本節では、置塩城に着目し、当時の夢前川との関係や景観を分析し、その時代における進歩や治水技術の向上を探る。加えて、時間の枠組みから夢前川の姿を捉え、史資料を活用して、考察する。

はじめに、置塩城の概要について述べる。置塩城は、現在の姫路市夢前町宮置に位置する城跡である。1996(平成8)年に、国指定文化財に指定された。1469(文明元)年に赤松正

則が築城したと伝えられ、廃城の、1581（天正9）年まで110年余りが置塩城の時代であった（兵庫県飾磨郡夢前町教育委員会，1986）。置塩城は、図7に示したように海拔約350mの山上にあり、西に夢前川をひかえた急斜面の山はだ、東には高い峰が連なっている。北には急斜面の深い谷がある。室町時代の山城は、領主の居館の防備や詰めの城として作られていることが分かる。

置塩山城は、姫路城の北方約10km余りの夢前川上流域の山上にある中世城郭跡である。この山は、置塩山（城山）と呼ばれ、西麓に夢前川がめぐり、城堀としての役目も果たしている。北、西、南の三方が切り立った急崖となり、要害の地となっている。山上からは、夢前川流域はもちろん、遠方までも見渡すことができ、さらに、山陽道を上下するものも一望できる。

この自然地形を利用した置塩城を中心とした町場の形成、諸産業、文化の発達、この後、現在に至るまで、形状こそ変化しているが、夢前川上流域の自然景観を形成し、今にその景観を伝えている。現在この地域の観光産業として開発され注目されているが、他の文化遺産なども含めた総合的な観光リゾートとして地域活性化につなげることが重要である。

（3）中流域の地域資源－書写山

中流域の地域資源として書写山を挙げる。置塩城とは違い、自然地形と宗教の複合体である書写山という山を地域資源として挙げることで、人文的、自然的な地域資源として比較することができる。書写山は歴史深く、現在は参拝客や観光客も多い、地域資源として書写山の役割は大きいものである。書写山円教寺は、姫路平野の北西端に位置し、書写山山上に展開する円教寺は天台宗別格本山の寺格を有し、西国三十三ヶ所観音霊場第二十七番札所として、人々の厚い信仰を集めてきた寺院である。書写山は、雪彦山を源流として南下する夢前川と菅生川が姫路平野へ入って合流する地点の北側に、両河川に挟まれるようにして位置する。円教寺は、966（康保3）年に性空上人によって開かれ、参詣場所や僧侶の修行の道場として栄え、西の比叡山とも呼ばれる。

書写山の東側には夢前川本流、西側には支流である菅生川が流れており、堀のような役目を果たしていると言える。書写山南東側には、書写ロープウェイがあり、現在では容易に登ることができ、山頂からは、姫路市街地を一望できる。

書写山は、映画やドラマの撮影現場としても利用されていた。2003年に公開の映画「ラストサムライ」や大河ドラマ「武蔵」等の撮影が行われた。これらのことから、書写山は、日本古来の文化を現在まで伝え、海外メディアからも注目を浴び、非常に魅力のある場所であることが分かる。以上の点から、夢前川中流域における地域活性化の視点から見ても書写山は、大きな影響を与えている。

表2 夢前川流域別特産品（産業）

流域区分	主な特産品
上流域	鹿谷茶、温泉、酒米、養鶏、竹炭
中流域	松茸、山椒、竹、藍染、書写塗

出所 山之内観光組合サイトより一部修正

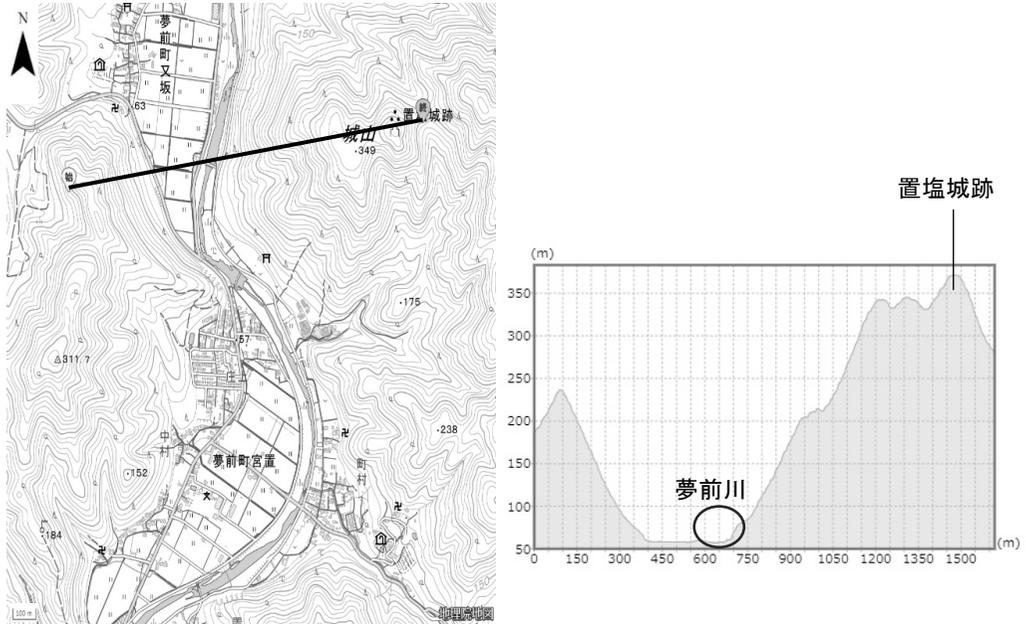


図7 置塩城周辺地形と断面

出所 国土地理院

5. おわりに

本研究で取り上げた事柄をまとめると、図8のようになる。上流域から見ていくと、上流域の自然地形的関係は、主に山間部で農村が発達している。そして、その地形や気候をうまく活用しながら、温泉や鹿谷茶などの産業を発達させてきた。次に、中流域では、自然地形的関係として上流域から中流域にかかる扇状地が拡がり都市部が現れてきた。そして、人文的關係では、江戸時代の流路変更から、人々の防災・減災に対する意識や技術が高まってきた。横関の構築は周辺地域の生活において重要な出来事であった。また、書写塗などの伝統工芸品が、その地の文化・伝統を生み出し、地域資源として発展して景観を形成してきた。これらから上流域と中流域の相互的關係として、現在までの治水による人々と夢前川水系との関わりや地域資源の観光名所化による地域活性化に役立ち、お互いに作用しあっている。自然や人文的關係を流域に作用しあうことで夢前川流域の今日までの景観が形成されてきたのである。

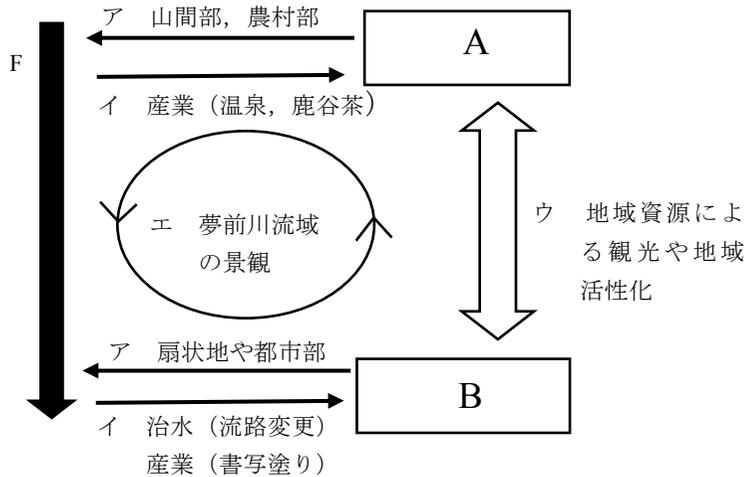


図8 夢前川流域の景観形成構図

引用・参考文献

- 神戸佳文 (2005) : 二つの性空上人坐像. 中元孝迪『播磨が見える BanCul No. 58 冬号』, 姫路市文化振興財団, pp. 30-33.
- 木村礎 (1991) : 大景観の変貌, 日本村落史講座編集委員会編『景観Ⅱ近世・近現代』, 雄山閣, pp. 3-22.
- 郷土史ふるさと安室編集委員会 (2005) : 『郷土史ふるさと安室』, 郷土史ふるさと安室編集委員会・安室中学校区地域夢プラン策定委員会.
- 末次忠司 (2016) : 『水害から治水を考える 教訓から得られた水害減災論』, 技報堂出版.
- 武内和彦 (1988) : 景観, 『世界大百科事典』, 平凡社.
- 田中拓弥 (2002) : 水系に起きる上流と下流の関係—鴨川・天野川流域の事例から—. 田中拓弥『水系研究の視点—琵琶湖・淀川水系におけるケーススタディー』, 京大大学生態学研究センター, pp. 2-17.
- 姫路市 (2018) : 『姫路市北部農山村地域活性化拠点施設整備方針案』.
- 姫路市史編集専門委員会 (1995) : 『姫路市史 第十五巻』, 姫路市, pp. 251-261.
- 兵庫県 (2013) : 『中播磨推進計画』.
- 兵庫県 (2014) : 『夢前川水系河川整備計画』.
- 兵庫県飾磨郡夢前町教育委員会 (1986) : 『置塩城』.
- 兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所 (2006) : 『夢前川』.
- 藤木明子 (1984) : 第一番 書写山円教寺 (天台宗), 『播磨西国三十三カ寺巡礼』, 神戸新聞出版センター, pp. 9-15.
- 八木哲浩 (1988) : 『播陽萬宝智恵袋 上巻』, 臨川書店.
- 養老孟司・岸由二 (2009) : 『環境を知るとはということか』, PHP 研究所.

吉田俊三 (1974) : 『夢前川流域史』, 兵庫印刷センター.

参考 URL

農林水産省 (2016) : 「8. 農業経営体_経営耕地の状況 兵庫県」, 2015年農林業センサス,
https://www.maff.go.jp/j/tokei/census/shuraku_data/2015/sa/sa_2015.html#sa_08
(2021年2月8日アクセス)

山之内観光組合 : 夢前町の観光,
<http://yamanouchikankou.net/> (2021年1月18日アクセス)

The Formation Process of Landscape in the Yumesaki River Watershed: Focusing on Flood Prevention Works and Local Resources

KAMO Yuki

Key Words : watershed, landscape, flood prevention works, local resources,
regional activation, Yumesaki River watershed